

健康手帳

医療における偶然 —患者の運と医師の運—

◆ 心身健康センター所長 廣瀬政雄



現代の医療では、エビデンスに基づいて治療方法が考案されますので、病気の治療の帰趨が偶然や運に左右されるようなことはほとんどありません。医療における偶然や運は誤差範囲に含まれるべきでしょう。しかし、偶然が治療結果に影響する症例も現実には存在します。

その症例は、私が一人医長として四国がんセンター病院（国立松山病院から移管）に勤務していた時のものでした。1983年の初冬のある日、生後2週間の新生児が発熱と弛緩性麻痺で受診しました。脳炎が疑われましたので、CT検査を行いましたところ、両側の側頭葉を中心として広範な出血巣が認められ、ヘルペス性全脳炎を示唆する所見でした。

ヘルペス脳炎とはヘルペスウイルスによって引き起こされる脳炎で、未治療での死亡率は全年齢の統計で60－70%といわれています。治療は、抗ウイルス作用を示す薬剤は知られていましたが、治療成績は充分ではありませんでした。

一方、当時、その数年前から、癌の化学療法が急速に進み始めて、それにとまなう二次性の免疫不全症による日和見感染が問題となっていました。ヘルペスウイルス感染もそのひとつでしたが、1977年にElison女史（1988年ノーベル医学生理学賞）らによりアシクロビル（ACV）が有効であることが発見され、ちょうど私が国立がんセンターで研修医として勤務していた時（1982年頃）に治験研究用に持ち込まれていたものを、許可を得て持ち帰っていたのです。しかし、重症の新生児に24時間付き添うわけにもいかなかったので、愛媛大学に紹介しました。

翌年の晩春、ひとりの婦人の訪問があり、元気になった乳児を見せられました。その子には軽い

麻痺が残っていましたが、薬剤の効果に感動するとともに、安堵の気持ちを覚えました。このケースは、私が経験した唯一のヘルペス脳炎の症例ですが、発売前でありながら、偶然、特効薬を手持ちしていたという、患者としても医師としても考えられない幸運が重なったと思います。

ヘルペス脳炎に対するACVの効果が確立したのが1984－1985年でしたので、新生児ヘルペス脳炎に対する治療成功例として、1983年の本症例は世界的にも最も早い段階のものと考えられました。この症例は愛媛大学からも私からも研究論文として報告はしていませんが、当然、報告すべきものであったと思います。ひとりの医師の臨床経験が他の多くの患者や医師の参考になるからです。

科学と偶然の関係では、多くの重要な発見が偶然に他の研究の途上で見つかっています。思わぬ発見をする能力のことをセレンディピティーというようです。これをパスツールは「幸運の女神は準備した所を訪れる」と表現しました。また、ゲーテは「発見は幸運、発明は知性」という言葉を残しています。ジャック・モノー（1965年ノーベル医学生理学賞）の「偶然と必然」という本には、宇宙誕生から地球上の生命誕生の条件が整うまでは偶然であったが、幾多の偶然が重なった後の生命の誕生と進化の過程は必然であったというようなことが書かれています。

医師の仕事が研究志向から臨床志向に変わって、わが国の臨床医の研究論文が激減していると言われています。しかし、常に目の前のひとりの患者に新鮮な目を注ぐことによって、疾患や治療に関する新発見を発見するような医師の運を引き寄せることができるのではないかと思います。